

教育格差問題を認識するようになったきっかけ

1. 教育を考える一言

「日本における学力格差の問題が、問題として世間に認識されていないことが問題である」
(NPO 法人 Teach For Japan 代表 松田 悠介)

2. 背景

これは、私が、教師スタッフとして、参加していた教育系 NPO 法人「Teach For Japan」の代表者である松田 悠介さんという方の言葉です。Teach For Japan は、経済的困難を背景として、低学力に悩む子供たちのいる学校や、地域に大学生や、社会人を派遣し、教育格差の問題を解決しようと活動している団体です。

アメリカでは、PISA の学力調査で、「就業が困難な学力レベルにいる」と言われるレベル 1 と評価された子供が 17.7%存在しています。このことは、アメリカで大きな社会問題として捉えられており、この問題を解決しようという動きも活発です。

では、日本において、学力格差は存在するのでしょうか？同じ PISA の学力調査において、日本でもレベル 1 の学力レベルの子供が 13.6%存在することが分かっています。貧困大国とよばれ、子供の学力格差の問題が広く認識されているアメリカとほぼ同等の割合で日本の子供たちの間にも学力格差が存在しているのです。しかし、日本国内ではこの実態について、ほとんど認識されていません。その為、有効な対策もとられていないのが現状です。冒頭の言葉は、この日本の教育格差の問題に対する認識に強い危機感を抱かれている松田さんからのメッセージです。

松田さんは、自身が中学時代に受けたいじめを当時の先生のおかげで、克服したという経験から教師になられた方です。実際の教育現場で、今の教育の在り方に疑問を感じ、その解決策を探すべくアメリカの大学院に留学されました。そこで出会ったのが、Teach for America (TFA) です。

TFA は、アメリカで、教育格差の進む貧困地域や、教育課題が山積の国内公学校に、アメリカ国内の優秀な学部卒業生や若年層の社会人を 2年間常勤講師として派遣するプログラムを実施している非営利組織です。松田さんは現在、日本において、このモデルを実現させるべく、活動されています。

3. 考察

私は、TFJ が開催した学習支援事業において、松田さんからこの言葉を聞きました。この言葉が強く印象に残った理由は、私自身、小中時代、周囲に、低学力に悩む友人がたくさんおり、彼らが学力の向上が見られないまま、狭い選択範囲での進路決定を行っていく様子を見てきた為です。しかし、そういったことを自分自身、問題として強く認識するまでには至ってはいませんでした。この言葉を聞き、問題を問題であるとして認識することが、いかに難しいのかということに気付かされ、自分も、問題を見て見ぬふりをするのではなく、立ち向かえる人間になりたいと思うようになりました。

関連文献

ウェンディ・コップ『いつか、すべての子供たちに』英治出版、2009